〈研究ノート〉

テロは「イスラム教の論理」に基づくものではない：ヘールト・ウィルダースによる反イスラム短編映画『フィトナ（Fitna）』に対するインドネシアを代表するイスラム学者クライシュ・シハッブ教授の見解

Terrorism is not Based on "Islamic Logic": The View of Indonesia's Leading Islamic Scholar Professor Quraish Shihab on the Anti-Islamic Short Film "Fitna" by Geert Wilders

大　形　里　美*
Satomi OHGATA

要　旨

オランダの野党政治家ヘールト・ウィルダースによって制作され、2008年に公開された反イスラム短編映画『フィトナ』は、イスラム教義について誤解を与える内容となっていたため、世界中のムスリムたちから強い反感を買った。同映画ではクルアーンの章句が意図的に前後の文脈から切り離され、過激なテロの映像とともに流される構成となっていた。クルアーンの章句は、前後の文脈から切り離しては正しく理解できない。本稿では、インドネシアを代表する著名なクルアーン解釈学者クライシュ・シハッブ教授による解説の概要を紹介する。同教授の解説から、イスラム教義が侵略を禁止し捕虜を人道的に扱うことを教えるなど、戦争に関して現代の国際法にも匹敵するような内容となっていることがわかる。

キーワード：反イスラム映画、イスラム教の論理、テロ、クルアーンの章句、人道的な教え

＊おおがたさとみ、九州国際大学現代ビジネス学部、ohgata@cb.kiu.ac.jp

1．はじめに

オランダの野党、自由党会派の指導者ヘールト・ウィルダース（Geert Wilders）は、2008年、自らが映画監督となり制作した17分間のセンセーショナルな反イスラムの短編映画『フィトナ（Fitna）』を過激な映像配信で知られるニュースサイト『LiveLeak』に公開し、世界中のイスラム教徒たちから強い反感を買った[1]。本稿は、同映画が物議を醸した2008年当時、元宗教大臣でインドネシアの著名なイスラム学者クライシュ・シハッブ（M.Quraish Shihab）教授が、同短編映画の内容がいかに客観性と学術的要件を欠くものであるかを明快に論じたPDF版文書[2]の概要を紹介するものである。

ウィルダースによる短編映画は、聖典『クルアーン（コーラン）』の章句と、テロリストによる攻撃の生々しい映像を同時に流す構成となっており、イスラム教に対して深刻な誤解を招く内容のものであったため、衝撃的なニュースとして世界中で報道された。なぜか日本のマスメディアではほとんど取り上げられることがなかったが、国連事務総長（当時）が非難声明を出したほどであった[3]。同映画をめぐっては、インドネシアでも大きく取り上げられ、同国で最も著名なクルアーン解釈学者であるクルアーン研究センター（Pusat Studi Al-Qur’an）所長クライシュ・シハッブ教授は、当初からイスラム学者として同映画の内容に抗議してほしいと周囲から強い要請を受けていたが、最初はそうした要請には答えないつもりでいたという。それは、同映画があまりにも悪質で、客観性や学術的要件を欠くものであったため、わざわざ敬意を払って相手にする価値さえないないと考えられたからであった。しかし、最終的には、事の重大さに鑑み、イスラム教に対する誤解を解くために、『フィトナの章句（Ayat-Ayat Fitna）』と題する97ページの手記をインターネット上に公開した。

なぜウィルダースによる反イスラム短編映画の公開から14年も経った今、同短編映画の誤りを解説したインドネシアのイスラム学者の手記を、ここでわざわざ日本語で紹介するのか。それは、近年、少なからぬ日本人が、イスラム

が危険な宗教であるかのような偏見を抱き始めていることに筆者が危機感を抱いているからに他ならない。とりわけ、2014－2015年にかけてISによる日本人人質殺害事件が起こったこともあり、イスラム過激派の特殊な思想を真の「イスラム教の論理」であるとするような視野狭窄的で無責任な内容のイスラム解説本[4]が近年一部の研究者によって出版されていることを憂慮している。日本では表現の自由が保障されているとはいえ、イスラム教について誤解と偏見に満ちた内容の本がイスラム学の基礎を全く踏まえることなく書かれ、流通している現状は、日本社会が今後イスラム教徒を偏見なく迎え入れ、調和の取れた共生社会を築いていく上で、真に有害であり、放置されるべきではない。本稿が日本社会における正しいイスラム理解の一助となれば幸いである。

2．クライシュ・シハッブ教授による『フィトナの章句』についての解説

クライシュ教授の手記の序文には、同手記が、上述の映画『フィトナ』に対する抗議文書としてではなく、イスラム教徒たち、そして全てのイスラムを知ろうとする者、そして映画『フィトナ』に影響された者に対して、ウィルダースが供したものがいかにイスラムの教えに反するものであるかを示すために書かれたものであると明記されている。

クライシュ教授は、イスラムの教えが、「真に公平で礼節を心得た平和へと向かわせる教えであり、微塵たりともテロを許すものではない」ことを、映画『フィトナ』で使用された章句ごとに、映画において意図的に使用されなかったその前後の章句を引用しながら、その正しい解釈を丁寧に解説している。

映画のタイトル”Fitna”は、「陰謀」、「分裂」、「激動」、「無秩序」など多様な意味を包含するアラビア語で、どの意味で使用されたかは不明だが、イスラムとその聖典に対して「中傷（Fitnah）」（インドネシア語ではFitnahは一般的に「中傷」の意味で使用されている）を行うことが主要な目的であったとも考えら

れるという。

３．短編映画『フィトナ』で使用されている５つのクルアーンの章句についての誤った解釈と正しい解釈

クライシュ教授は、短編映画『フィトナ』の中で曲解されているとする５つの章句を取り上げ、クルアーン学の見識に基づいて、その解釈の誤りを丁寧に解説している。以下、それぞれの章句についてクライシュ教授の解説の要点を紹介する。

- 戦利品章（al-Anfal　クルアーン 第８章）60節
- 婦人章（an-Nisa’　クルアーン 第４章）56節
- ムハンマド章（Muhammad　クルアーン 第47章）４節
- 婦人章（an-Nisa　クルアーン 第４章）89節
- 戦利品章（al-Anfal　クルアーン 第８章）39節

３．１　戦利品章（al－Anfal）　第60節

イスラムの教義が曲解されているとして、最初に取り上げられている章句は、戦利品章（al－Anfal　クルアーン 第８章）第60節で、内容は以下の通りである。

وَأَعِدُّوا لَهُمْ مَا اسْتَطَعْتُمْ مِنْ قُوَّةٍ وَمِنْ رِبَاطِ الْخَيْلِ تُرْهِبُونَ بِهِ عَدُوَّ اللَّهِ وَعَدُوَّكُمْ وَآخَرِينَ مِنْ دُونِهِمْ لَا تَعْلَمُونَهُمُ اللَّهُ يَعْلَمُهُمْ ۚ وَمَا تُنْفِقُوا مِنْ شَيْءٍ فِي سَبِيلِ اللَّهِ يُوَفَّ إِلَيْكُمْ وَأَنْتُمْ لَا تُظْلَمُونَ

戦利品章（al-Anfal　クルアーン 第８章）　60節

「かれらに対して，あなたの出来る限りの（武）力と，多くの繋いだ馬を備えなさい。それによってアッラーの敵，あなたがたの敵に恐怖を与えなさい。かれら以外の者にも，またあなたがたは知らないがアッラーが知っておられる者に

も。あなたがたが，アッラーの道のために費やす凡てのものは，十分に返済され，あなたがたは不当に扱われることはないのである。」

ウィルダースの短編映画では、この章句を、イスラム教義がテロを行うことをイスラム教徒に命じている証拠として取り上げている。同章句の「（وَ عَدُوَّكُمْ）Wa‘aduwwakum ／あなた方の敵に」まで読み上げ、”Prepare for them whatever force and cavalry ye are able of gathering to strike terror into the hearts of the enemies of Allah and your enemies.（かれらに対して，あなたの出来る限りの（武）力と，多くの繋いだ馬を備えなさい。それによってアッラーの敵，あなたがたの敵に恐怖を与えなさい。）”という英語の字幕が出された後、2001年９月11日に世界貿易センタービルに飛行機が激突した映像、そしてマドリードとロンドンでの爆破テロ事件の犠牲者の映像が、クルアーンがテロをすることを命じていることの結果であるかのように流されていた。

この部分について、クライシュ教授は次の問題点を指摘する。まず、”turhibun”という言葉の訳語を“テロ（terror）“としているが、”turhibun”という言葉は、本質的には、「恐れる／震える」を意味するrahiba（رَهِبَ）を語根とする派生語であり、テロを行うことを意味するものではないと指摘している。現代アラビア語においてテロ、もしくはテロリストという言葉は、同じ語根からなる”irhab”という言葉で示されているが、意味論的にも、またクルアーンでの使用においても、現代その言葉によって意図されるものとは異なるという。また、震えさせられるものは一般市民ではなく、過ちを犯していない者でもなく、さらにはすべての過ちを犯した者でもなく、震えさせられるものは、アッラーの宗教の敵であり、社会の敵であると指摘する。

さらに上述の章句は、それに先立つ以下の第55節から59節までの章句から切り離されては正しくは理解され得ないという。

إِنَّ شَرَّ الدَّوَابِّ عِندَ اللهِ الَّذِينَ كَفَرُواْ فَهُمْ لاَ يُؤْمِنُونَ

戦利品章　55節「アッラーの御許で最悪の罪人は，不信心の者であろう。かれらは信じなかったからである。」

الَّذِينَ عَاهَدتَّ مِنْهُمْ ثُمَّ يَنقُضُونَ عَهْدَهُمْ فِي كُلِّ مَرَّةٍ وَهُمْ لاَ يَتَّقُونَ

戦利品章　56節「これらはあなたが約束を結んだ者で，その後かれらは毎度約束を破り，主を畏れない。」

فَإِمَّا تَثْقَفَنَّهُمْ فِي الْحَرْبِ فَشَرِّدْ بِهِم مَّنْ خَلْفَهُمْ لَعَلَّهُمْ يَذَّكَّرُونَ

戦利品章　57節「それでもしあなたがたが，戦いでかれらを打ち破ったならば，かれらとその背後に従う者を追い散らせ。恐らくかれらは反省するであろう。」

وَإِمَّا تَخَافَنَّ مِن قَوْمٍ خِيَانَةً فَانبِذْ إِلَيْهِمْ عَلَى سَوَاء إِنَّ اللهَ لاَ يُحِبُّ الخَائِنِينَ

戦利品章　58節「また人びとの中あなたに対し裏切る恐れがあるならば，対等の条件で（盟約を）かれらに返せ。本当にアッラーは裏切る者を愛されない。」
戦利品章　59節「信じない者に（アッラーを）出し抜けると思わせてはならない。かれらは決して（アッラーを）挫けない。」

وَلاَ يَحْسَبَنَّ الَّذِينَ كَفَرُواْ سَبَقُواْ إِنَّهُمْ لاَ يُعْجِزُونَ

これらの章句から、クルアーンによって示されているイスラムの教えが、約束を何度も破り、主を恐れない不信心の者に対してさえ、戦いにおいて、彼らが反省するよう、殺すのではなく、追い散らすよう命じていることがわかる。また第58節においては、条約を結んでいる間は、裏切ったものに対してもその条約を破棄しない限り、相手を攻撃しないよう教えている。つまり、たとえ

敵に対してであろうとも、条約の破棄を伝えることなく攻撃することは、禁じられた裏切りの形態の一つであるとされる。

そして第60節との関係については、「出来る限りの（武）力と，多くの繋いだ馬を備えなさい。それによってアッラーの敵，あなたがたの敵に恐怖を与えなさい。」というのは、あくまでも攻撃を仕掛けてくる相手に対しての抑止効果を目的とするものであるが、映画『フィトナ』においては、テロを行うことを命じているとされている点で間違っている。

またクルアーンは、力を意味する“Quwwah”という言葉をさまざまな派生語で用いているが、これは対抗する力という意味で用いているのであって、虐待するためとか、破壊するため、さらにいえば使用されるためではなく、敵を恐れさせるために“見せ付ける”ためだけのものとして用いられている。そのため、力の行使はできる限り避けられ、使用されるとしても、それはアッラーの敵、社会の敵に対して使用される。そして敵とは、彼が敵対するものに対して害をもたらそうとするものである。さらに自分自身、自分の領土、宗教、国家を守るために武器を使用することはテロと同一視されることはできない。

３．２　婦人章（an-Nisa’）　56節

二つめは、婦人章（an-Nisa’）　56節である。

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا بِآيَاتِنَا سَوْفَ نُصْلِيهِمْ نَارًا كُلَّمَا نَضِجَتْ جُلُودُهُمْ بَدَّلْنَاهُمْ جُلُودًا غَيْرَهَا لِيَذُوقُوا الْعَذَابَ ۗ إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَزِيزًا حَكِيمًا

「本当にわが印を信じない者は，やがて火獄に投げ込まれよう。かれらの皮膚が焼け尽きる度に，われは他の皮膚でこれに替え，かれらに（飽くまで）懲罰を味わわせるであろう。誠にアッラーは偉力ならびなく英明であられる。」

この章句は、映画『フィトナ』の中で、「本当にわが印を信じない者は，やが

て火獄に投げ込まれよう。かれらの皮膚が焼け尽きる度に，われは他の皮膚でこれに替え」という翻訳を見せながら、（يَزُوقُوا۟ ٱلْعَذَابَ　yadzuqal-‘adzab）「かれらに（飽くまで）懲罰を味わわせるであろう」というところまで聞かせている。そしてこれらは、一人の“ムスリム”が、刀を突き刺しながら激しく演説し、アッラーフ・アクバルという叫び声とともにジハードをするよう誘っている映像が一緒に流されている。その後、一人の幼い“ムスリマ（ムスリム女性）“へのインタビュー映像が映される。ユダヤ教徒について質問された彼女は、彼らのことをサルや豚だと答え、誰がそういっているのかと質問されると、彼女は“アッラー”だと答えている。

この章句を制作者が使用した意図について、クライシュ教授は、彼らはイスラム教徒が崇拝している神がいかに残忍であるかを描きたかったのだろうとみている。しかしながら、同章句は、現世の拷問について語っているものではなく、地獄、すなわち来世において起こりうることについて語っているものであるという。預言者ムハンマドが、誰であろうと火によって拷問を与えることを明確に禁じていることをその理由として挙げる。

لا يُعَذِّبُ بِالنَّارِ إلاَّ رَبُّ النَّارِ

「神（すなわちアッラー）の火以外の火によって拷問を与えてはいけない。」（Hamah al-Aslami によって HR.Abu Daud に伝えられたハディース〔預言者ムハンマドの言行録〕）

ただし、このクルアーン婦人章第56節については、一部のイスラム学者の間では字義的な意味においては解釈されていないと解説される。すなわち、一部の学者たちは、異教徒に対する拷問は皮膚が焼け尽きるところで終わる、つまりそこでアッラーは新しい生を与えられるのだと解釈する。しかし、別の学者たちは、この章句は脅すためのものだと解釈しているという。そしてクライシュ教授は、イスラム教の信じる唯一神アッラーは、クルアーンに何度も繰り

返し明示されているように慈悲深く、慈愛あまねくお方であるから、これらの脅しは本当に起こるとは限らないという点を強調する。

加えて、クライシュ教授は以下のように解説している。脅しというのは、悪事を働くことがないよう防止するために使用される一つの教育形態であり、他の諸宗教も同様のことを行っているものである。イエス・キリストもまた、マタイによる福音書第49–50節において、神が悪い者を火に投げ込むという表現を使っていることをあげ、火の拷問による脅しがイスラムだけに特有のものではないことを指摘する。

マタイによる福音書　第49節「この世の終わりにも、同じようなことが起こります。御使いがやって来て、正しい者と悪い者とを区別し、」第50節「悪い者を火に投げ込むのです。彼らはそこで泣きわめき、歯ぎしりしてくやしがります。」（http://ebible.echurch-jp.com/）

アメリカの歴史学者ウィリアム・ドゥラント（Will Durant[5]）も著書”The Story of Civilizations（文明の話）”の中で、ユダヤ教徒とキリスト教徒が地獄の責め苦に対する信仰を取り上げていることを取り上げ、地獄の脅威がいかに人々を善行へと突き動かすことができたのかを指摘していることについてクライシュ教授は言及する。ダンテ（Dante）の『神曲（The Divin Comedy）』にも地獄のさまざまな責め苦が描かれている。

しかし、宗教はこうした地獄の責め苦について教えているだけでなく、人々が絶望しないよう天国についても教えていることに触れ、神の恵み（rahmat）は神の怒り（amarah）を凌ぐものであり、天国は地獄よりもはるかに広いことをクライシュ教授は強調する。そう考える根拠としてクルアーン家畜章、第160節「善いことを行う者は，それと同じようなものを10倍にして頂ける。だが悪いことを行う者には，それと等しい応報だけで，かれらは不当に扱われることはないであろう。」を挙げている。

次にイスラム教徒の子供の発言については、仮にその子供が本当にイスラム教徒であるとした場合においても、パレスチナ住民がこれまでユダヤ教徒の国家であるイスラエルに激しく弾圧されてきたことを考慮しなければならないと指摘する。彼らの領土は奪われ、若者たちは捉えられ殺され、何十年も前から彼らは難民キャンプでの生活を余儀なくされている。こうした状況が彼らの両親たちをして、子供たちにユダヤ教徒に対する憎しみを教えることを生み出している。そこでその憎しみを正当化するものとして、一部のユダヤ教徒を非難するクルアーンの章句を彼らが使用したとしても不思議ではないとクライシュ教授は述べる。

قُلْ هَلْ أُنَبِّئُكُم بِشَرٍّ مِّن ذَٰلِكَ مَثُوبَةً عِندَ ٱللَّهِ ۚ مَن لَّعَنَهُ ٱللَّهُ وَغَضِبَ عَلَيْهِ وَجَعَلَ مِنْهُمُ ٱلْقِرَدَةَ وَٱلْخَنَازِيرَ وَعَبَدَ ٱلطَّـٰغُوتَ ۚ أُو۟لَـٰٓئِكَ شَرٌّ مَّكَانًا وَأَضَلُّ عَن سَوَآءِ ٱلسَّبِيلِ

食卓章　第60節「言ってやるがいい。『アッラーの御許の応報で，それよりも悪いものを，あなたがたに告げようか。それはアッラーが見放した者，御怒りを被むった者，サルまたはブタとされた者，そして邪神に仕える者，かれらは，最悪の境地におり，（正しい）道から遠く迷い去った者たちである。』」

また「サルとブタとされた者」という上記のクルアーンの表現について、これらが文字通りサルと豚にされたと理解するのではなく、彼らの性質が比喩的にサルと豚であったとする解釈についても付け加える。ちなみにサルはアウラット（恥部）を常に見せている唯一の動物で、命令に従わせるためには鞭を振るわれなければならず、制裁を下されてから、あるいは脅されることによってしかクルアーンによって命じられている教えに従わないとされる。また豚は、まったく嫉妬心を抱かない動物で自分のメスが他のオスと交尾しても平気である。

こうした性質は例えばイムラーン章第75節に示されているように、すべてのユダヤ教徒に当てはまるわけではなく、彼らの一部だけであることをクライシュ教授は強調する。

وَمِنْ أَهْلِ ٱلْكِتَـٰبِ مَنْ إِن تَأْمَنْهُ بِقِنطَارٍ يُؤَدِّهِۦٓ إِلَيْكَ وَمِنْهُم مَّنْ إِن تَأْمَنْهُ بِدِينَارٍ لَّا يُؤَدِّهِۦٓ إِلَيْكَ إِلَّا مَا دُمْتَ عَلَيْهِ قَآئِمًا
ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ قَالُوا۟ لَيْسَ عَلَيْنَا فِى ٱلْأُمِّيِّـۧنَ سَبِيلٌ وَيَقُولُونَ عَلَى ٱللَّهِ ٱلْكَذِبَ وَهُمْ يَعْلَمُونَ ۝

イムラーン章　第75節「啓典の民の中には，あなたが千金を託してもこれを返す者もあれば，あなたが不断に催促しない限り，一枚の銀貨を託しても返さない者もある。それはかれらが『無知の者たちに就いては，わたしたちに責めはない。』と言うためである。かれらは故意に，アッラーに虚偽を語るものである。」

そして、こうした姿や性質が変えられることについては、ユダヤ教徒の宗教指導者たちによっても認められているところであったこともクルアーンの啓示によって暗示されているという。

وَلَقَدْ عَلِمْتُمُ ٱلَّذِينَ ٱعْتَدَوْا۟ مِنكُمْ فِى ٱلسَّبْتِ فَقُلْنَا لَهُمْ كُونُوا۟ قِرَدَةً خَـٰسِـِٔينَ

雌牛章　第65節「またあなたがたは，自分たちの中で安息日の提を破った者に就いて知っている，われはかれらに言い渡した。『あなたがたは猿になれ，卑められ排斥されよ。』」

そして最後に、もしユダヤ教徒たちの行為の結果として、パレスチナの住民がさまざまな多大な苦しみを経験することがなかったならば、こうした女の子の言葉は聞かれなかっただろうとクライシュ教授は結んでいる。

３．３　ムハンマド章　第４節

三つめの章句は、ムハンマド章第４節である。

فَإِذَا لَقِيتُمُ ٱلَّذِينَ كَفَرُواْ فَضَرْبَ ٱلرِّقَابِ حَتَّىٰٓ إِذَآ أَثْخَنتُمُوهُمْ فَشُدُّواْ ٱلْوَثَاقَ فَإِمَّا مَنًّۢا بَعْدُ وَإِمَّا فِدَآءً حَتَّىٰ تَضَعَ ٱلْحَرْبُ أَوْزَارَهَا ۚ ذَٰلِكَ وَلَوْ يَشَآءُ ٱللَّهُ لَٱنتَصَرَ مِنْهُمْ وَلَٰكِن لِّيَبْلُوَاْ بَعْضَكُم بِبَعْضٍ ۗ وَٱلَّذِينَ قُتِلُواْ فِى سَبِيلِ ٱللَّهِ فَلَن يُضِلَّ أَعْمَـٰلَهُمْ

ムハンマド章　第４節「あなたがたが不信心な者と（戦場で）見える時は，（かれらの）首を打ち切れ。かれらの多くを殺すまで（戦い），（捕虜には）縄をしっかりかけなさい。その後は戦いが終るまで情けを施して放すか，または身代金を取るなりせよ。もしアッラーが御望みなら，きっと（御自分で）かれらに報復されよう。だがかれは，あなたがたを互いに試みるために（戦いを命じられる）。凡そアッラーの道のために戦死した者には，決してその行いを虚しいものになされない。」（【聖クルアーン】日亜対訳注解聖クルアーンによる）

映画では、同章句の「あなたがたが不信心な者と（戦場で）見える時は，（かれらの）首を打ち切れ。かれらの多くを殺すまで（戦い），（捕虜には）縄をしっかりかけなさい。」という部分だけが使用され、赤い服を着た捕虜が首を切られるシーンが映されている。

ここでクライシュ教授は、クルアーンの章句の中の、أَثْخَنتُمُوهُمْ（Atskhantumuhum）という言葉が、a blood bathと訳されている点がまず問題であることを指摘する。ちなみに、映画では、以下のような英訳が当てられている。"Therefor, when ye meet the unbelievers, smite at their necks and when ye haver caused a bloodbath among them, bind a bond family on them.”クライシュ教授によれば、أَثْخَنتُمُوهُمْ と（Atskhantumuhum）いう言葉は重く内容が詰まっていて動くあるいは動かされることが困難なものをあらわす言葉であるأَثْخَنَ（atskhana）という言葉に由来するものである。そしてこの部分は、多くのイスラム学者たちによって「彼らを非常に明確に負かす」という意味で捉えられ

ているという。そこで一部の解釈者たちはその意味を「すでに彼らの多くを殺して」という意味に捉えている。しかし、常にそのようにしなければならないということではない。殺さなくとも彼らの武器を壊してしまった場合や、兵糧や情報が絶たれてしまった場合なども全面的な敗北にいたることはあるからである。

そして映画では、その後に続く部分を使っていないことが問題であり、さらに第４節がどのような文脈で啓示されているものかを示す第１節から第３節にもまったく言及していないことが問題であるとクライシュ教授は指摘する。第１－３節は以下の通りである。

ٱلَّذِينَ كَفَرُوا۟ وَصَدُّوا۟ عَن سَبِيلِ ٱللَّهِ أَضَلَّ أَعْمَـٰلَهُمْ

ムハンマド章　第１節「信仰しない者，また（人びとを）アッラーの道から妨げる者には，その行いを迷わせられる。」

وَٱلَّذِينَ ءَامَنُوا۟ وَعَمِلُوا۟ ٱلصَّـٰلِحَـٰتِ وَءَامَنُوا۟ بِمَا نُزِّلَ عَلَىٰ مُحَمَّدٍ وَهُوَ ٱلْحَقُّ مِن رَّبِّهِمْ ۙ كَفَّرَ عَنْهُمْ

سَيِّـَٔاتِهِمْ وَأَصْلَحَ بَالَهُمْ

ムハンマド章　第２節「信仰して善行に勤しむ者，またムハンマドに下されたものを主からの真理として信仰する者には，かれはその罪障を消滅し情況を改善なされる。」

ذَٰلِكَ بِأَنَّ ٱلَّذِينَ كَفَرُوا۟ ٱتَّبَعُوا۟ ٱلْبَـٰطِلَ وَأَنَّ ٱلَّذِينَ ءَامَنُوا۟ ٱتَّبَعُوا۟ ٱلْحَقَّ مِن رَّبِّهِمْ ۚ كَذَٰلِكَ يَضْرِبُ ٱللَّهُ لِلنَّاسِ أَمْثَـٰلَهُمْ

ムハンマド章　第３節「それも，信仰しない者が虚偽に従い，信仰する者が主からの真理に従うためである。このようにアッラーは，人びとのために比喩により（教えを）説かれる。」

これらの章句では、異教徒、すなわちマッカにおいて人々が自分たちの選ぶ

宗教と信仰を信奉することを妨げようとした人々について書かれている。こうした異教徒たちについては、12人の指導者だけであったとする一部のイスラム学者の見解もあり、すべての異教徒ではなかったこと、そして何より「戦場で出会ったとき」という部分が重要であることが指摘されている。実際、このことは、預言者ムハンマドはマッカとマディーナに長期間滞在したが、その間に非イスラム教徒を殺したり傷つけたりするどころか、彼らを邪魔することさえしなかった事実によっても裏付けられるという。

戦争において、両者は相手を打ち負かし、支配するまで戦うということは、今世紀にいたるまで、この世の終わりまで変わらないということは認められなければならない。そこで、「彼らの首を打ち切れ」という表現が使用されているのは、もちろん適当な比ゆ表現であるというだけでなく、当時もっとも一般的な方法であったからである。そして、この方法はもっとも早く殺す方法であり、その早さゆえに敵／犠牲者を苦しませすぎることがない方法なのだとも言える。

しかし、戦争の目的は相手を負かすことにあり、殺すことではない。そこで、第４節では敵が力を失ったらすぐにやめなければならないと明言されている[6]。

そして、生きている敵については逃げ出さないように強く縛り付けて置くよう命じられているが、これも敵が逃げて再び攻撃をしてこないようにという目的のためであり、戦争の際にはごく一般的なことである。そしてこの啓示が下されたころ、捕虜はモスクの柱に縛り付けられたりしたが、十分な食べ物を与えられたという。クルアーンは、自分たちの好物であるにもかかわらず捕虜たちにも与えたとして、預言者ムハンマドの教友、Ali Ibn Abi Thalib一族を褒めている。

وَيُطْعِمُونَ ٱلطَّعَامَ عَلَىٰ حُبِّهِۦ مِسْكِينًا وَيَتِيمًا وَأَسِيرًا

人間章　第８節「またかれらは，かれを敬愛するために，貧者と孤児と捕虜に食物を与える。」

それほどまで捕虜は人道的に扱われたと考えるべきである。預言者ムハンマドの教友で、捕虜たちを殺すことを提案した者がいたが、預言者はその提案を受け入れることはなく、たとえば読み書きを教えるなどイスラム教徒たちにとって有益なことを行うということを贖いとすることを条件に彼らを解放したとされている。

また次のような出来事も歴史に残っているとクライシュ教授は述べている。ユダヤ教徒のクライザ族（Bani Quraizah）が捕らわれた時、捕虜のための家がなかったために日差しが強く照りつける野外に捉えられていた。それを見た預言者ムハンマドは、「昼間の強い日差しの下、そして武器の熱さの下に彼らを集めてはいけない。彼らが涼しさを感じるまで休ませなさい[7]。」と命じたという。このことは、捕虜がいかなる拷問を受けることも許されないということを意味している。この預言者ムハンマドの人道的な態度は、ようやく1907年オランダのLahai条約（The Lahai Agreement）、そして1929年と1949年のジュネーブ条約によって法律化されたものだとクライシュ教授は指摘する。

ムハンマド章　第４節では、捕虜について、身代金なしに釈放するか、身代金をとって釈放するか、どちらかの選択肢を命じている（「その後は戦いが終るまで情けを施して放すか，または身代金を取るなりせよ。」）が、この部分についても映画は明示しようとしていない。これは、その内容が、おそらく現在世界的に認められている法規定に沿うものであるからだろうとクライシュ教授は分析する。アッラーの教えと預言者の行いは、それ以前の人類には知られていなかったものであり、それ以前は捕虜に情けがかけられることはなかった。それに対して、預言者が行ったことは、個人ではなく、「国家」の名の下に、

戦争捕虜を身代金と引き換えにするものだった。クライシュ教授は、こうしたイスラムの教えと預言者の行いを、人権を尊重するとされる先進国と称される国々の国家権力の下で捕虜が受けたと新聞などで報じられている扱いと比較すべきだと述べている。アブグレイブ刑務所、グアンタナモ収容所等でのテロ容疑者に対する非人道的な扱いなど、深刻な人権侵害の実態を明らかにされたことを念頭に述べられているだろうことは言うまでもない。

3．4　婦人章　第89節

４つめの章句は、婦人章　第89節である。

وَدُّواْ لَوْ تَكْفُرُونَ كَمَا كَفَرُواْ فَتَكُونُونَ سَوَآءً ۖ فَلَا تَتَّخِذُواْ مِنْهُمْ أَوْلِيَآءَ حَتَّىٰ يُهَاجِرُواْ فِى سَبِيلِ ٱللَّهِ
فَإِن تَوَلَّوْاْ فَخُذُوهُمْ وَٱقْتُلُوهُمْ حَيْثُ وَجَدتُّمُوهُمْ ۖ وَلَا تَتَّخِذُواْ مِنْهُمْ وَلِيًّا وَلَا نَصِيرًا ۙ

婦人章　第89節「かれらは自分が無信仰なように，あなたがたも無信仰になり，（かれらの）同類になることを望む。だからかれらがアッラーの道に移って来るまでは，かれらの中から（親しい）友を得てはならない。もしかれらが背をむけるならば，ところかまわずかれらを捕え，見付け次第かれらを殺せ。かれらの中から決して友や援助者を得てはならない。」

映画では、この章句は、イスラム教の優位性を強調する何人かのイスラム教徒の指導者や布教者によるさまざまなコメントとともに映される。そして、それらは映画の中で、クルアーンがすべての非イスラム教徒をいつでもどこででも殺すことを命じていると描くための根拠として使われている。

しかし、そうした理解はクルアーンの真の教えから非常にかけ離れたものであり、その章句を正しく理解するためには、それに先立つ章の文脈に結び付けられなければならないとクライシュ教授は指摘する。

それに先立つ章の内容から、ここで言われている偽善者が、異教徒すべてを

示すのではなく、メッカに在住し、イスラムを信奉しているといいながら、実はイスラムの敵をなす隠れた敵であることがわかるとクライシュ教授は述べる。また戦争中でないならば、偽善者が自由に徘徊しているため、かれらを、秘密を打ち明けるような親しい友とすることが禁じられているのであり、この要請は、大変論理的であり、知恵と道徳を持つものは誰であれ、受け入れることができるものであると解説される。

فَمَا لَكُمْ فِى ٱلْمُنَـٰفِقِينَ فِئَتَيْنِ وَٱللَّهُ أَرْكَسَهُم بِمَا كَسَبُوٓا۟ ۚ أَتُرِيدُونَ أَن تَهْدُوا۟ مَنْ أَضَلَّ ٱللَّهُ ۖ وَمَن يُضْلِلِ ٱللَّهُ فَلَن تَجِدَ لَهُۥ سَبِيلًا

婦人章　第88節「あなたがたは，偽信者たちのことで，どうして2派に分れたのか。アッラーはかれらの行いのために，かれらを（不信心に）転落させられたではないか。あなたがたは，アッラーが迷わせられた者を導こうと望むのか。本当にアッラーが迷わせられた者には，決して道を見いだせないであろう。」

また、上述のような解釈は、他の多くの章句やムスリムが権力と繁栄を手にした時代の歴史的事実によっても支持されるものであるとして、以下の章句を例として紹介している。

لَّا يَنْهَىٰكُمُ ٱللَّهُ عَنِ ٱلَّذِينَ لَمْ يُقَـٰتِلُوكُمْ فِى ٱلدِّينِ وَلَمْ يُخْرِجُوكُم مِّن دِيَـٰرِكُمْ أَن تَبَرُّوهُمْ وَتُقْسِطُوٓا۟ إِلَيْهِمْ ۚ إِنَّ ٱللَّهَ يُحِبُّ ٱلْمُقْسِطِينَ

試問される女章　第8節「アッラーは，宗教上のことであなたがたに戦いを仕掛けたり，またあなたがたを家から追放しなかった者たちに親切を尽し，公正に待遇することを禁じられない。本当にアッラーは公正な者を御好みになられる。」

إِنَّمَا يَنْهَىٰكُمُ ٱللَّهُ عَنِ ٱلَّذِينَ قَٰتَلُوكُمْ فِى ٱلدِّينِ وَأَخْرَجُوكُم مِّن دِيَٰرِكُمْ وَظَٰهَرُوا۟ عَلَىٰٓ إِخْرَاجِكُمْ أَن تَوَلَّوْهُمْ وَمَن يَتَوَلَّهُمْ فَأُو۟لَٰٓئِكَ هُمُ ٱلظَّٰلِمُونَ ۚ

試問される女章　第９節「アッラーは只次のような者を，あなたがたに禁じられる。宗教上のことであなたがたと戦いを交えた者，またあなたがたを家から追放した者，あなたがたを追放するにあたり力を貸した者たちである。かれらに縁故を通じるのを（禁じられる）。誰でもかれらを親密な友とする者は不義を行う者である。」

これらの章句は次のようなことを明らかにしているとクライシュ教授はいう。すなわち「彼らとの社会的な相互作用の中で、彼らが正しい側にあり、あなた方のうちの一人が誤った側にあった場合、あなた方はたとえそれが非ムスリムであろうとも、正しい側を擁護し、勝たせなければならない。本当にアッラーは公平に待遇する人々をお好みになる。本当にアッラーは、宗教上のことであなたがたと戦いを交えた者，またあなたがたを家から追放した者，あなたがたを追放するにあたり力を貸した者たち、秘密を打ち明ける者たちを親しい友とすることを禁じているに他ならない。

一方、Abubakar Ibnu Arabi（西暦1148年没）は、aqsithû について、「公平に待遇する」という義務は、争いを仕掛けてくる敵に対しても向けられているということを根拠に、「あなた方の財産の一部を与えなさい」いとう意味で解釈している。

またクライシュ教授は、エジプトのムスリム思想家サイイド・クトゥブ（Sayyid Quthub）が、同章句を解釈した際の以下のようなコメントを紹介している。

「イスラムは平和で、愛を信条とする宗教である。それは、平和と愛という傘で、この世をあまねく擁護することを目的とした一つのシステムである。す

べての人間がアッラーの旗の下に互いに知り合い愛し合う兄弟として集められている。アッラーの敵を攻撃する行為とこの宗教の信奉者の敵以外に、その方向を妨げるものはない。しかしながら、もしその彼らが平和的な態度を取るならば、イスラムは敵対行為をとるものでは全くなく、それを行うことを努力するものではない。それどころか、敵対的な状況にある中においても、イスラムは関係の調和という要素、すなわち振る舞いの正直さ、公平や待遇などを精神の中に保ち、敵が差し出された善行を受け入れ、その旗の下に加わる時を待っている。イスラムは、人間の心が澄み、まっすぐな方向へと向かうようになる日を待つことに絶望してなど全くいない。」

そしてクライシュ教授は、同章句がムスリムに対して、非ムスリムと関係を結ぶことを禁じることを意味してなどおらず、ましてや彼らをいつでもどこでも殺すよう命じているものなどではないことを再度強調する。同章句は、単に親しい関係を結ぶことを禁じているだけであり、それもまたすべての非ムスリムではなく、明らかにイスラムに敵対するものたちについてだけであり、それはたとえムスリムであると自認した者たちに対しても同様であると解説される。

３．５　戦利品章　第39節

５つ目の章句は、戦利品章第39節である。

وَقَٰتِلُوهُمۡ حَتَّىٰ لَا تَكُونَ فِتۡنَةٞ وَيَكُونَ ٱلدِّينُ كُلُّهُۥ لِلَّهِۚ فَإِنِ ٱنتَهَوۡاْ فَإِنَّ ٱللَّهَ بِمَا يَعۡمَلُونَ بَصِيرٞ

戦利品章　第39節「だから，迫害と好計がなくなるまで，また（かれらの）教えがすべてアッラーを示すまで，かれらと戦え。だがかれらがもし（敵対を）止めるならば，本当にアッラーは，かれらの行うことを御存知であられる」

この章句についても、一部のみ切り取られて朗読され、以下のような訳（原文は英語）が映されている。

「争いがなくなり、宗教がアッラーのものとなるまでかれらと戦え。」

そして、それに合わせて、何人かの指導者や布教者が、イスラムの優越性を説き、全世界へのイスラムの布教することについての楽観主義を内容とするスピーチを行う様子が映し出される。

ここでまず強調される必要がある第一の点は、الدِّينُ という言葉が「宗教」と訳されている点である。なぜならば、これは意図されている宗教が、預言者ムハンマドによって教えられた宗教であるという印象を生み出しかねないからである。確かに、一つの意味は宗教であるが、ad-din という言葉のすべてが、宗教を意味するわけではない。

たとえば、“Malik yaum ad-din” は、「宗教の日の主宰者」ではなく、「最後の審きの日の主宰者」と訳される。Din という言葉の別の意味は、「敬虔さ」「敬意を伴った服従」というもので、これこそが上述の章句で意図されているのである。そのため、この用語は、英語訳においてはしばしば”worship” と訳されている。

クライシュ教授によれば、「預言者の歴史は、預言者と教友たちが、13年間にわたって多神教徒たちの残忍さに報復することなく忍耐したことを証明している。」そうして次第に段階を追って、ついに報復することへの許可が下されたのである。それさえも、非常に厳しい条件をもってである。

当然ながら、「イスラムは地上に足をつけ現実と向き合う宗教である。この人生において、人々はあふれる欲望と野心を持っている。そしてそれゆえ紛争が生まれる。であるからこそ、その紛争に関連する導きも必要とされるのであり、その中には戦うことに関する命令も含まれるのである。戦いはもちろん快いものではない、それどころか悪いことでありうる。しかし、もしそれが自らを護るため、そして正義を護るために行われ、拷問を避けて行われたならば、そのとき戦いは善を生み出すものであり、やむを得ず通らなければならない道である。」と同教授は述べる。

「イスラムは「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。（マタイ　5：39）」とは教えていない。入れ替わり立ち代り、さまざまな形態のクルアーンの導きは、クルアーンの章句が啓示された歴史が、妨害に直面していたことを証明している」とクライシュ教授は指摘する。

戦いに関しては、まず忍耐することを命じる次のような啓示が下されている。

فَٱصْبِرْ كَمَا صَبَرَ أُوْلُواْ ٱلْعَزْمِ مِنَ ٱلرُّسُلِ وَلَا تَسْتَعْجِل لَّهُمْ ۚ كَأَنَّهُمْ يَوْمَ يَرَوْنَ مَا يُوعَدُونَ لَمْ يَلْبَثُوٓاْ إِلَّا سَاعَةً مِّن نَّهَارٍۭ ۚ بَلَـٰغٌ
فَهَلْ يُهْلَكُ إِلَّا ٱلْقَوْمُ ٱلْفَـٰسِقُونَ ۚ

砂丘章　第35節「あなたは耐え忍べ。（且つて）使徒たちが，不屈の決意をしたように耐え忍べ。かれら（不信心の者）のために急いではならない。かれらに約束されたこと（懲罰）を見る日，まるで（死から復活までの期間を）一日の中のほんの一時しか過してはいなかったかのように（思うであろう）。（これはアッラーからの）御達しである。滅ぼされるのは，（アッラーの）掟に背く者たちだけである（ということを）。」

そして、次に妨害に対し、善行を行うことを命じる次のような啓示が続く。

ٱدْفَعْ بِٱلَّتِى هِىَ أَحْسَنُ ٱلسَّيِّئَةَ ۚ نَحْنُ أَعْلَمُ بِمَا يَصِفُونَ

信者たち章　第96節「善行によって，悪を撃退せよ。われはかれらの言うことを熟知している。」

そして同時に次のように命じられている。

قُل لِّلَّذِينَ ءَامَنُواْ يَغْفِرُواْ لِلَّذِينَ لَا يَرْجُونَ أَيَّامَ ٱللَّهِ لِيَجْزِىَ قَوْمًۢا بِمَا كَانُواْ يَكْسِبُونَ

跪く時章　第14節「信仰する者たちに言え。アッラーの日を望まない者でもゆるしてやれ。なぜなら，現世でのかれらの所業に応じて，アッラーはかれら一団に来世で報いられるのだから。」

そしてその後、預言者は武器ではなく、クルアーンの章句をもって宗教の教えのために戦うよう奮闘努力（ジハード）することを命じられた。

فَلَا تُطِعِ ٱلْكَـٰفِرِينَ وَجَـٰهِدْهُم بِهِۦ جِهَادًا كَبِيرًا

識別章　第52節「だから不信者に従ってはならない。かれらに対しこの（クルアーン）をもって大いに奮闘努力しなさい。」

それらのすべての命令を預言者は彼に従うものたちと実践した。しかし迫害は納まるどころか、激しさを増した。クルアーンの戦利品章第30節に描写されているように、預言者を捕まえ殺す努力を彼らは行った。そして、その後しばらくして、預言者がマディーナに遷都することに成功した後、報復することへの許可が次の啓示によって下されたのである。

وَإِذْ يَمْكُرُ بِكَ ٱلَّذِينَ كَفَرُواْ لِيُثْبِتُوكَ أَوْ يَقْتُلُوكَ أَوْ يُخْرِجُوكَ ۚ وَيَمْكُرُونَ وَيَمْكُرُ ٱللَّهُ ۖ وَٱللَّهُ خَيْرُ ٱلْمَـٰكِرِينَ

戦利品章　第30節「また不信心者たちが，あなた（ムハンマド）に対し如何に策謀したかを思い起しなさい。あなたを拘禁し，あるいは殺害し，あるいはまた放逐しようとした。かれらは策謀したが，アッラーもまた計略をめぐらせられた。本当にアッラーは最も優れた計略者であられる。」

أُذِنَ لِلَّذِينَ يُقَـٰتَلُونَ بِأَنَّهُمْ ظُلِمُوا۟ ۚ وَإِنَّ ٱللَّهَ عَلَىٰ نَصْرِهِمْ لَقَدِيرٌ

巡礼章　第39節「戦いをし向ける者に対し（戦闘を）許される。それはかれらが悪を行うためである。アッラーは，かれら（信者）を力強く援助なされる。」

「戦争は、迫害を回避し、平和を確立するために他に選択肢がない場合にクルアーンによって認められている。それもまた直接戦いに入るのではなく、敵にムスリムの仲間に入る、もしくは攻撃を互いに仕掛け合わないという条約を結ぶという選択肢を与えている。もし、それら二つの選択肢が拒否された場合、やむを得ず武器がものをいう。しかしその場合も、戦闘に関わらない者は保護される。子供や女性は護られなければならず、木々も伐採してはならず、環境も破壊してはいけない。」

映画に戻れば、そこで部分的に読誦され、誤って解釈されている章句の全文は以下の通りである。

وَقَـٰتِلُوا۟ فِى سَبِيلِ ٱللَّهِ ٱلَّذِينَ يُقَـٰتِلُونَكُمْ وَلَا تَعْتَدُوٓا۟ ۚ إِنَّ ٱللَّهَ لَا يُحِبُّ ٱلْمُعْتَدِينَ

雌牛章　第190節「あなたがたに戦いを挑む者があれば，アッラーの道のために戦え。だが侵略的であってはならない。本当にアッラーは，侵略者を愛さない。」

وَٱقْتُلُوهُمْ حَيْثُ ثَقِفْتُمُوهُمْ وَأَخْرِجُوهُم مِّنْ حَيْثُ أَخْرَجُوكُمْ ۚ وَٱلْفِتْنَةُ أَشَدُّ مِنَ ٱلْقَتْلِ ۚ وَلَا تُقَـٰتِلُوهُمْ عِندَ ٱلْمَسْجِدِ ٱلْحَرَامِ حَتَّىٰ يُقَـٰتِلُوكُمْ فِيهِ ۖ فَإِن قَـٰتَلُوكُمْ فَٱقْتُلُوهُمْ ۗ كَذَٰلِكَ جَزَآءُ ٱلْكَـٰفِرِينَ

雌牛章　第191節「かれらに会えば，何処でもこれを殺しなさい。あなたがたを追放したところから，かれらを追放しなさい。本当に迫害は殺害より，もっと悪い。だが聖なるマスジドの近くでは，かれらが戦わない限り戦ってはなら

ない。もし戦うならばこれを殺しなさい。これは不信心者への応報である。」

فَإِنِ ٱنتَهَوۡاْ فَإِنَّ ٱللَّهَ غَفُورٞ رَّحِيمٞ

雌牛章　第192節「だがかれらが（戦いを）止めたならば，本当にアッラーは，寛容にして慈悲深くあられる。」

وَقَٰتِلُوهُمۡ حَتَّىٰ لَا تَكُونَ فِتۡنَةٞ وَيَكُونَ ٱلدِّينُ لِلَّهِۖ فَإِنِ ٱنتَهَوۡاْ فَلَا عُدۡوَٰنَ إِلَّا عَلَى ٱلظَّٰلِمِينَ

雌牛章　第193節「迫害がなくなって，この教義がアッラーのため（最も有力なもの）になるまでかれらに対して戦え。だがもしかれらが（戦いを）止めたならば，悪を行う者以外に対し，敵意を持つべきではない。」

第190節は、ムスリムにいつ戦いを始めることが許されるかについて語っており、第193節はいつ戦いを彼らがやめなければいけないのか、そして戦いをやめようとしない者が背負わなければならない結果について説明している。「それ（戦い）は、攻撃する敵がいたときに開始されることが出来る。そして、映画『フィトナ』はムスリムによる戦いがイスラム教が世界に布教されたときに終わるかのようなイメージを植えつけようとしているが、そうではなく、迫害が終わったときにやめられなければならない。なぜなら戦いの目的は迫害の停止であるからだ。」

クライシュ教授は、戦いがイスラムが世界中を支配したときに終わるのではないことを強調している。なぜなら世界中を支配することが戦いの目的ではないからである。ましてやイスラムは戦争による宗教の布教を禁止しており、「第193節の「この教義がアッラーのため（最も有力なもの）になるまで」という意味は、アッラーの教義、とりわけ誰に対しても宗教と信条を選び実践する自由を与えるという教義は従われなければならないということである。なぜなら、以下の啓示にあるように、それぞれが責任を持つものであるからである。」

لَكُمْ دِينُكُمْ وَلِىَ دِينِ

不信者たち章　第６節「あなたがたには，あなたがたの宗教があり，わたしには，わたしの宗教があるのである。」

そして雌牛章　第193節で*「だがもしかれらが（戦いを）止めたならば，悪を行う者以外に対し，敵意を持つべきではない。」*と強調している。

つまり、ムスリムは迫害が終わったら、すぐに戦いをやめなければならない。なぜなら迫害が終わった後も戦いを続けるならば、彼こそが迫害を行っているのであり、アッラーの望まれる何かあるいは誰かを通じて攻撃を受け、敵対行為を受けても当然だからである。

イスラムの教えにおいて、それ程までに戦いの終結は重要であり、クルアーンは、「だがかれらがもし和平に傾いたならば，あなたもそれに傾き，アッラーを信頼しなさい」と説いている。そして、「道理にかなったことを勧め」「人びとを憎悪するあまり，あなたがたは（仲間にも敵にも）正義に反してはならない。」と正義を行うことを説いているとして、以下の章句が紹介されている。

وَإِن يُرِيدُوٓا۟ أَن يَخْدَعُوكَ فَإِنَّ حَسْبَكَ ٱللَّهُ ۚ هُوَ ٱلَّذِىٓ أَيَّدَكَ بِنَصْرِهِۦ وَبِٱلْمُؤْمِنِينَ

戦利品章　第61節「だがかれらがもし和平に傾いたならば，あなたもそれに傾き，アッラーを信頼しなさい。本当にかれは全聴にして全知であられる。」

خُذِ ٱلْعَفْوَ وَأْمُرْ بِٱلْعُرْفِ وَأَعْرِضْ عَنِ ٱلْجَـٰهِلِينَ

高壁章　第199節「199.（ムハンマドよ）覚容を守り，道理にかなったことを勧め，無知の者から遠ざかれ。」

لَيْسُوا۟ سَوَآءً ۗ مِّنْ أَهْلِ ٱلْكِتَـٰبِ أُمَّةٌ قَآئِمَةٌ يَتْلُونَ ءَايَـٰتِ ٱللَّهِ ءَانَآءَ ٱلَّيْلِ وَهُمْ يَسْجُدُونَ

イムラーン章　第113節「かれら（全部）が同様なのではない。啓典の民の中にも正しい一団があって，夜の間アッラーの啓示を読誦し，また（主の御前に）サジダする。」

يَـٰٓأَيُّهَا ٱلَّذِينَ ءَامَنُوا۟ كُونُوا۟ قَوَّٰمِينَ لِلَّهِ شُهَدَآءَ بِٱلْقِسْطِ ۖ وَلَا يَجْرِمَنَّكُمْ شَنَـَٔانُ قَوْمٍ عَلَىٰٓ أَلَّا تَعْدِلُوا۟ ۚ ٱعْدِلُوا۟ هُوَ أَقْرَبُ لِلتَّقْوَىٰ ۖ وَٱتَّقُوا۟ ٱللَّهَ ۚ إِنَّ ٱللَّهَ خَبِيرٌۢ بِمَا تَعْمَلُونَ ۚ

食卓章　第８節「あなたがた信仰する者よ，アッラーのために堅固に立つ者として，正義に基いた証人であれ。人びとを憎悪するあまり，あなたがたは（仲間にも敵にも）正義に反してはならない。正義を行いなさい。それは最も篤信に近いのである。アッラーを畏れなさい。アッラーはあなたがたの行うことを熟知なされる。」

４．クライシュ教授の解説の要点

以下、クライシュ教授のここまでの解説の要点をまとめておきたい。

（１）戦利品章　60節について、イスラム教義がテロを行うことをイスラム教徒に命じている証拠として取り上げているのは誤りである。イスラム教義は、「約束を何度も破り、主を恐れない不信心の者に対してさえ、戦いにおいて、彼らが反省するよう、殺すのではなく、追い散らすよう命じている」。そして「条約を結んでいる間は、裏切ったものに対してもその条約を破棄しない限り、相手を攻撃しないよう教えている。つまり、たとえ敵に対してであろうとも、条約の破棄を伝えることなく攻撃することは、禁じられた裏切りの形態の一つであるとされる。」

（２）婦人章　第56節について、イスラムの教えが敵に対して懲罰を味わわせることを教えているかのように解釈するのは大きな誤解である。「敵に恐怖を与えなさい」というのが、映画においては、テロを行うことを命じているとされているが、あくまでも攻撃を仕掛けてくる相手に対しての抑止効果を目的とするものである。このクルアーンの章句は、あくまでも他の宗教と同様に、悪事を働くことがないように地獄の懲罰を描いているのである。そのことはハディースに書かれているように、預言者は誰であっても火によって拷問を与えてはいけないと教えていることからも明らかである。

（３）ムハンマド章第４節について、イスラムの教えが、敵の首を打ち切れ、彼らの多くを殺すまで戦えと教えていると結論づけるのは誤りである。多くのイスラム学者は「殺す」という意味ではなく、「非常に明確に負かす」という意味で捉えている。そして何よりもこの章句は全ての異教徒ではなく、「戦場で出会った時」の敵についてのものであり、預言者がマッカとマディーナにおいて非イスラム教徒を殺したり傷つけたりするどころか、彼らを邪魔することさえしなかったことからも、その章句の意味は明らかである。

戦争では相手を打ち負かし、支配するまで戦うというのが今世紀に至るまで変わらない事実である。戦争の目的は相手を負かすことであって、殺すことではない。ムハンマド章第４節では敵が力を失ったらすぐに戦いをやめなければならないと明言され、貧者、孤児、捕虜に食べ物を与えたことが描かれており、捕虜が非常に人道的に扱われたことがうかがえる。捕虜については、身代金なしに釈放するか、身代金をとって釈放するか、どちらかの選択肢を命じている。異教徒は誰でも殺せとするような教えでないことは言うまでもない。

（４）婦人章　第89節は、クルアーンがすべての非イスラム教徒をいつでもどこででも殺すことを命じていると描くための根拠として使われているが、これも大きな誤りである。

*「アッラーは，宗教上のことであなたがたに戦いを仕掛けたり，またあなたがたを家から追放しなかった者たちに親切を尽し，公正に待遇することを禁じられない。」とクルアーンに書かれている通り、この章句は、*ムスリムに対して、非ムスリムと関係を結ぶことを禁じることを意味してなどおらず、ましてや彼らをいつでもどこでも殺すよう命じるものなどではない。同章句は、単に親しい関係を結ぶことを禁じているだけであり、それもまたすべての非ムスリムではなく、明らかにイスラムに敵対するものたちについてだけであり、そしてそれはたとえ彼らがムスリムであると自認したとしても同様である。

（5）戦利品章　第39節の「・・・・争いがなくなり、宗教がアッラーのものとなるまでかれらと戦え。」という章句をもって、イスラムの教えが戦いを勧めていると解釈するのは誤りである。預言者の歴史は、預言者と教友たちが、13年間にわたって多神教徒たちの残忍さに報復することなく忍耐したことをよく証明している。

戦いに関するクルアーンの啓示は、以下のようであった。まず忍耐することを命じる啓示、次に妨害に対して、善行を行うことを命じる啓示が続いた。そしてその後、預言者は武器ではなく、クルアーンの章句をもって宗教の教えのために戦うよう奮闘努力（ジハード）することを命じられた。そして、それらのすべての命令を預言者は彼に従う者たちと実践したが、迫害は納まるどころか、激しさを増した。またクルアーンの戦利品章第30節に描写されているように、敵は、預言者を捕まえ殺そうとした。そして、その後しばらくして、預言者がマディーナに遷都することに成功した後、報復することを許可する啓示が初めて下された。しかし、*「もしかれらが（戦いを）止めたならば，悪を行う者以外に対し，敵意を持つべきではない。」と明言されている点が重要である。*

5．おわりに

以上、本稿では、オランダの野党政治家ウィルダースが2008年に公開した反イスラム短編映画『フィトナ』の問題点について、インドネシアの著名なイスラム学者クライシュ・シハッブ教授が書いた見解の概要を紹介した。クライシュ教授は、クルアーン解釈学を専門とするインドネシア初のイスラム学者ともいわれ、宗教大臣も務めた経験がありインドネシアで最も尊敬されるイスラム学者であると言っても過言ではない。同教授は、1944年南スラウェシ出身で、マカッサルのアラウディン国立イスラム大学の学長などを務められた著名なイスラム学者を父親にもち、幼い頃から毎日父親によるクルアーン解釈を聞いて育ち、エジプトのアズハル大学でイスラム学を修めた。

欧米で流布されている情報は、とりわけ十字軍の戦い[8]以来、イスラムの敵によって伝えられたもので、欧米のキリスト教徒たちは、イスラムや預言者ムハンマドについてそもそも本当に全く知らないことに加え、近年、イスラムが、テロリズム、無知、貧困、盲目の狂信主義などとしばしば関連付けられることによって状況が深刻になっていると同教授は指摘している。そこで、こうしたハラスメントに対して取るべき態度としては、正しい情報を集め、イスラム教義を説明する布教を行うことが重要であると述べている。

日本においても、冒頭で触れたように、近年イスラム過激派の論理こそがイスラム教の本当の教えであるかのような誤ったイメージを植え付ける内容の書籍が複数出版されている。そしてそれらの書籍では、まさに本稿で紹介したようなイスラム過激派が敵を攻撃する際に使用する章句を取り上げ、あたかもそれらの章句がクルアーンにあることで過激派による暴挙が引き起こされているかのように論じられている。しかし、クライシュ教授が解説しているように、イスラム教義は戦争を仕掛けること、ましてやテロ行為を行うことを教える宗教などではない。

クルアーンの章句は、前後の文脈と切り離しては正しく理解できない。ウィ

ルダースによって制作された短編映画の内容は、クルアーンの章句が意図的に前後の文脈と切り離され、過激なテロの映像とともに流される構成となっている点で非常に問題であることを、私たちはクライシュ教授の解説から知ることができる。またクルアーンで使用されているアラビア語の意味も、現代アラブで使用されているアラビア語の意味と全く同じであるとは限らない。

そしてクライシュ教授の解説から、イスラム教義がいかに道徳的であるか、を知ることができる。戦争に関しても侵略を禁止したり捕虜を人道的に扱ったりすることを教えており、敵や異教徒に対しても人道的な教えが説かれていた。その内容は、現代の国際法の内容に匹敵するものであると言っても過言ではない。

残念ながら、都合の良いようにクルアーンの章句を切り取ってテロのために使用する過激派もいるが、そうした特殊な解釈こそが本当のイスラム教の論理であるかのように解説する書籍は、誤ったクルアーン解釈を社会に広めることで、イスラムに対する誤解や偏見を生み出す点で、社会にとって真に有害である。「イスラム教では異教徒は殺害の対象とされる」,「イスラム教は世界を戦いに駆り立て，世界征服を目論む宗教である」と解説するような書籍は、その単純な論理展開から一見「わかりやすい」書籍として一般読者から高評価を得ているようであるが、現代の日本社会にとって極めて危険である。浅薄なイスラム理解に基づく有害な書籍が表現の自由の名の下に出版され続けるなら、日本社会でもいずれ、ヨーロッパ社会のようにイスラモフォビアが深刻化しイスラム教徒を排斥するような社会になってしまうことが危惧され、将来に大きな禍根を残すことになるだろう。無知と誤解に基づき、読者を明らかに誤ったイスラム理解へと導く、著しくバランスを欠いた内容の書籍が無責任に出版されないことを切に願う。

【注】

1　ウィルダースによって制作された短編映画の内容が、あまりに過激であったため、Live

Leakスタッフへの脅威が深刻であるとして、同映画は翌日には公開が停止された。その後しばらくはGoogle Videoでコピーが視聴できていたが、現在は視聴不可能である。Jenna Wortham，WIRED「オランダ右派政治家の反イスラム映画、オンラインで物議」2008年３月31日，https://wired.jp/

2　当時インターネット上に公開された文書である。M. Quraish Shihab，AYAT-AYAT FITNA: Sekelumit Keadaban Islam di Tengah Purbasangka（『フィトナの章句：誤解の只中におけるイスラムの少しの礼儀正しさ』），Penerbit Lentera Hati, 2008.

3　“U.N.'s Ban condemns Dutch film as anti-Islamic,” MARCH 29, 2008. https://www.reuters.com/article/us-dutch-islam-film-un-idUSN2844232220080328

4　たとえば、飯山陽（2018）『イスラム教の論理』新潮社がある。同書は、学会誌では、著者がイスラム法学の諸理論について正確な理解を欠いていることが重大な問題点であることが書評で指摘され、具体的な問題点が論じられているが、Amazonのレビューでは一般読者からとても分かりやすいと高評価を得ている。同書に対するイスラム研究者による書評は、下記のサイトに掲載されている。松山洋平，「飯山陽著『イスラム教の論理』新潮社，2018年」，『オリエント』61（1），74，2018．https://www.jstage.jst.go.jp/article/jorient/61/1/61_74_78/_pdf/-char/ja

5　ウィリアム・ジェームズ・デュラント（1885-1981）はアメリカ人歴史学者・哲学者で、1935年から1975年にかけて刊行された11巻にわたる超大作 “The Story of Civilization"（文明の話）によって哲学・歴史の著述家として世界的な評価を得ており、1977年には、米国政府から市民に与えられる最高の栄誉の1つ、大統領自由勲章をフォード大統領から贈られている。

6　インドネシア語の注釈では”Sampai batas apabila kamu telah melumpuhkan gerak mereka,”「お前が彼らの動きを麻痺させるところまで」となっていると解説されているが、日本語による注釈では、「かれらの多くを殺すまで（戦い）」とされている。

ムハンマド章第4節　「あなたがたが不信心な者と（戦場で）見える時は、（かれらの）首を打ち切れ。かれらの多くを殺すまで（戦い）、（捕虜には）縄をしっかりかけなさい。その後は戦いが終るまで情けを施して放すか、または身代金を取るなりせよ。もしアッラーが御望みなら、きっと（御自分で）かれらに報復されよう。だがかれは、あなたがたを互いに試みるために（戦いを命じられる）。凡そアッラーの道のために戦死した者には、決してその行いを虚しいものになされない。（『日亜対訳　注釈　聖クルアーン』宗教法人 日本ムスリム協会）

ちなみに、インドネシア語の注釈も一つではないようで、インドネシア政府（宗教省）によるクルアーン注釈では、”apabila kamu telah mengalahkan mereka”つまり、「お前が彼らを負かしたなら」となっている。

ムハンマド章第４節（Surat Al-Muhammad, ayat 4）　Apabila kamu bertemu dengan orang-orang kafir（di medan perang）maka pancunglah batang leher mereka. Sehingga apabila kamu telah mengalahkan mereka maka tawanlah mereka dan sesudah itu kamu

boleh membebaskan mereka atau menerima tebusan sampai perang berakhir. Demikianlah apabila Allah menghendaki niscaya Allah akan membinasakan mereka tetapi Allah hendak menguji sebahagian kamu dengan sebahagian yang lain. Dan orang-orang yang syahid pada jalan Allah, Allah tidak akan menyia-nyiakan amal mereka.（http://www.geocities.com/CapeCanaveral/3304/terjemah.html より）

لاَ تَجْمَعُوْا عَلَيْهِمْ حَرَّ هذَا اْليَوْمِ وَ حَرَّ الْسَلاَحِ قِيْلُوْ هُمْ حَتَّى يَرْدُوْا.

7

M. Quraish Shihab, *Ayat-Ayat Fitna Sekelumit Keadaban Islam di Tengah Purbasangka,* Pusat Studi Al-Quran & Penerbit Lentera Hati, 2008, p.52

8　十字軍について日本の世界史で教えられている内容は、西洋の世界史がそのまま日本語訳された資料が使用されているため、十字軍側の見方になっているが、事実は大きく異なるようである。『イスラーム世界事典』（明石書店）には以下のような解説がある。「「戦闘は200年もの間続いたが、当初十字軍が唱えたようなキリスト教迫害の事実は認められておらず、イスラム側は十字軍の目的すら理解していなかったという。しかし、十字軍が行った大量殺戮は、以後ムスリムの間に、異教徒に対する不寛容な風潮を生み出す結果となった。」「一人のフランス人兵士が帰郷してから残した記録によれば、シリア北部の町マアッラを襲ったとき、「われらが同志たちは大人の異教徒をなべに入れて煮た上に、子どもたちを串焼きにしてむさぼりくらった。」これを「フランクの蛮行」という。1099年7月15日のエルサレム。フランクの兵士たちは、くるぶしまで血の海にひたり、「神、そを欲したもう」と喜びにむせび泣きながらゴルゴダのだらだら坂を上り、丘の上のイエスの墓に詣でた。」世界史の記述のあり方も見直されなければならない

【参考文献】

片倉もとこ他編集（2002）『イスラーム世界事典』明石書店.

宗教法人 日本ムスリム協会（2000）『日亜対訳　注釈　聖クルアーン』（第 6 刷）.

松山 洋平（2018）「書評, 飯山陽著『イスラム教の論理』新潮社，2018年 2 月」,『オリエント』61(1), pp.74-78. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jorient/61/1/61_74_78/_pdf/-char/ja（閲覧日：2022年 7 月10日）.

Jenna Wortham, WIRED「オランダ右派政治家の反イスラム映画、オンラインで物議」, 2008年 3 月31日，https://wired.jp/（閲覧日：2022年 7 月10日）.

Kementerian Agama Republik Indonesia, *Quran Kemenag,*（インドネシア共和国宗教省『インドネシア宗教省 クルアーン注釈』）https://quran.kemenag.go.id/（閲覧日：2022年 7 月10日）.

M. Quraish Shihab（2008），*AYAT-AYAT FITNA: Sekelumit Keadaban Islam di Tengah Purbasangka*（『フィトナの章句：誤解の只中におけるイスラムの少しの礼儀正しさ』），

Penerbit Lentera Hati.

Reuters,“U.N.'s Ban condemns Dutch film as anti-Islamic,” MARCH 29, 2008. https://www. reuters. com/article/us-dutch-islam-film-un-idUSN2844232220080328（閲覧日：2022年7月10日）.